「ハレとケ」　通信

第4号

「非日常」と「日常」の、日本の風情のかたちを楽しむ暮らしをご提案する季刊誌です。

建設に携わることの幸せを、おすそわけ。

物語のある建築（4）割烹旅館　魚定

「ハレとケ」のある　暮らしかた　【一年の無事と新年への願いを込めて／酉の市】

花ある数寄屋（4）「下地窓」

中津万象園「花の歳時記」（4）紅葉

かさねの色（4）「朽葉」

平成21年9月発行

表紙写真：昨年、香川県庁の前で拾った落ち葉。

物語のある建築（4）　設計施工／富士建設株式会社

「割烹旅館　魚定」

今回の「物語のある建築」では、創業一〇〇年超、親子四代で守り続けた割烹旅館【魚定】の松田トモさんとゆみさんにお話をうかがいました。日本人の食、娯楽、企業風土などがめまぐるしく移り変わるこの時代を、美しい「和」の建築と共に歩んできた物語です。

―魚定さんって、いつ頃から旅館の経営をされていらっしゃるのですか？

（トモさん）「さぁ、何年ぐらいになるのでしょうか…。なにせ、うちは割烹旅館の許可番号が、香川県で二十三番目か二十四番目か、そのくらいなんです。古いって言うのがよく分かりますよねえ。明治初めには既に商売をしていましたから、ゆうに百年は経っています。」

―割烹旅館を始められる前は、どんなお仕事を？

（トモさん）「魚を売っていました。詫間の魚市場で魚を仕入れて、天秤棒担いで善通寺まで売りに行く。そして買っていただくと、その場で捌いて刺身にしたり、簡単に料理をして食べて貰ったりしていたとか。」

―善通寺まで！評判が良かったのですね。

（トモさん）「詫間は潮の流れがちょうど良くて、半島のこちら側と向こう側では味が違う、と言われていたみたいですね。」

―お魚がおいしかったことと、お料理の腕が良かったことから、詫間町で割烹を？

（トモさん）「そうでしょうね。うちの屋号は【魚定】なのですが、その名前は、善通寺に魚売りに行った際に、乃木希典大将（注・善通寺第11師団初代師団長を務めていた）に付けてもらったのだとか。つまり、初代は【定吉】という名前だったのですが、乃木大将が、うちの魚を食べて、『おまえの持ってくる魚は旨い。【魚売りの定吉】だから、【魚定】を屋号にするといい』、と付けてくださったんだそうです。そのことは父が何度も嬉しそうに語っていました。その定吉の嫁がフユと言いまして、ずいぶん頭が切れる賢い女性だったそうですが、はじめの頃は、簡単な小料理屋やカフェーを開業したりもしていました。カフェー営業当時のハイカラなエプロンを着けた女給さんの写真も、うちには残っています。」

―この、旅館のある場所の回りは商店街になっていますけど、昔はここがメインストリートだったのでしょうか？

（トモさん）「もちろん！　ここは詫間中央商店街、といって、詫間町のメインストリートでした。この一本向こうの通り、つまり今の県道の辺りは海で、自転車がやっと通れるくらいの道しかなかったんですよ。だから、バスもここを通っていました。」

―そのころの詫間の町。たとえば、どんなお客さまがいらしていたんでしょう？

（トモさん）「詫間は塩田の町ですから、塩田のオーナーさんとか、やはりそういう人が主だったみたいですよ。ちょっとした社交場のようなものでしょうか。でも、カフェーはあまり流行らなかったようです。やはりそんなハイカラなものは、土地柄にも合わなかったのでしょうね。」

―では、その後、割烹を？

（トモさん）「はい。でも、今の建物の建設が始まったのは、昭和46年、ちょうど塩田廃止の年だったと思います。だけど、最初の建物も、あなたのところでお世話になっているんですよ。まだ会社はなかったけど、あなたのひいひいおじいちゃん（曾々祖父）も大工さんだったから…。」

―魚定さんは、「割烹旅館」ですが、割烹か旅館か、どちらかが先に出来て…というような経緯はあるのですか？

（トモさん）「いや、うちは初めから割烹旅館、と両方同時の出発だったんです。今は、旅館か、割烹か、どちらか一方しか許可が取れないと聞きますけれど、うちはずっと割烹旅館、だから、今もそのスタイル。」

―富士建設との付き合いは、いつ頃から？

（トモさん）「富士建設さんとは、うちの二代目があなたのひいおじいちゃんと同級生、そして、あなたのおじいちゃんとおばあちゃんと、私の主人が同級生。その縁でひいおじいちゃんの頃から、うちは全部富士建

↑松田トモさん。長年魚定を守ってきた。

↑ゆみさん。明るく気さくで、とても美しいひとだ。

設さんです。
なかでも主人とあなたのおばあちゃんは小学生からずうっと同じクラスで幼なじみ。だから、私にとっては、富士建設さんはなんと言っても先代の社長がいちばん懐かしい。うちのゆみちゃんが、かんちゃんと馴染みがあるように、ね。」

―かんちゃん？

（トモさん）「あ、富士建設の常務さんのことです。一伸さん、で、かんちゃん。（笑）」

―今の建物を建て始めた頃の思い出ってありますか？

（トモさん）「その頃、今の税関のところが、専売公社だったんですよ。たしか、その建物も、富士建設さんがしているはず。そこのオープン記念に、何かお料理を…と言われて、そんな大人数のためのお料理は出来ない、と慌てていたら、富士建設の社長さんが、『あのなぁ、都会にはオードブル、いうもんがあるらしい。それを作ってみようや。』と提案してくれた。
でも、オードブル、と言われても、そんなもの聞いたことがないから、何をお皿に盛ればいいのか、誰も分からない。なんとか考えて、色々なものを工夫して少しずつ、すぐに手にとって食べられる形で皿に盛り合わせました。それで良いのかどうかなんて分かりませんけど、社長さんも、『おいしく食べられたらそれでエエがな。』と楽しんで。その当時のお料理は、今よりもずっと手間のかかるものばかりですから、おいしかったとは思いますよ。」

―オードブル！当時、最先端ですよねえ。

（トモさん）「そうでしょうねえ。」

（ゆみさん）「そういえば、今は忘年会なんかで鍋物なんていうのは定番ですが、あれも、このあたりで初めて作ったのはうちなんですよ。ね？」

（トモさん）「そうそう。あのね、ある企業の社長さんが東京へ行って〈鍋物〉を初めて食べて、『これはエエなあ！』と感動したらしいんです。そして出張の帰り、土鍋を買って来てくれた。
　その土鍋を持ってうちにやってきて、『あのな、都会では、こういう風な料理の出し方をするんやで。すごくええ雰囲気やから、わしの言う通りに作ってみてん？』と。お客さまの目の前で土鍋で野菜や肉を煮て、そのまま供するスタイルは、それまで無かったんですねえ。
その社長さんは糖尿病だったので、『具は肉でも魚でもええけど、わしは糖尿病やから魚がええな。』なんて言ったりして。（笑）お客さまが皆さんあちこちで活躍をされるから、その先々で見聞きした色んなことを教えてくれて、うちは楽しかった。」

―そのころから、旅館の建物はほぼ今のかたちに？

（トモさん）「いや、とんでもない！何回も増築・改修を重ねて、今の形です。もうこれだけ増築に増築を重ねてくると、富士建設さんじゃなきゃ、うちのことは分からないでしょうねえ。」

―このお部屋も、とっても綺麗ですよねえ。自分で自社の建物を褒めるのもおかしな話ですが、建具のデザインとか柱の細さとか、うちの特徴がすごく良く出ているなあ、と感じます。

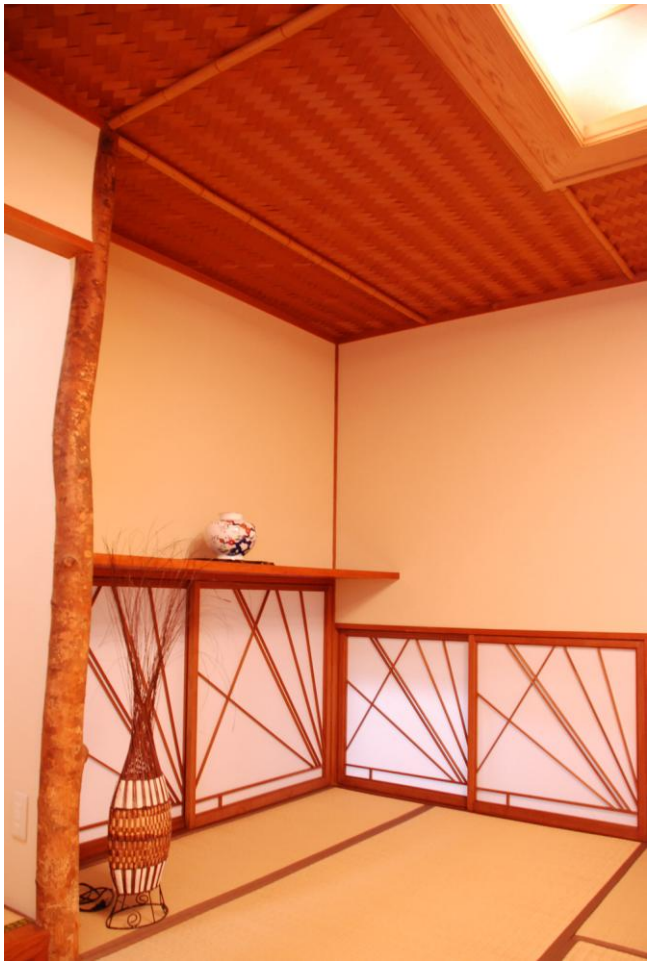
（トモさん）「ね、綺麗でしょう。（笑）」

―ただ、こういった柱の細さや建具の華やかさ、木材の使い方、というのは、けっこうこの辺りでは珍しいスタイルだったんじゃないかと思うんです。太い柱を使った重厚なスタイルの方が立派な家、という見方もあったと思うのですが、富士建設の提案するそういったデザインに不満・疑問を感じたことはなかったのですか？

（トモさん）「うーん、それは無かったですね。建てるにあたってあちこち見に連れて行って貰ったりもしましたけど、とくにどこをお手本にした、ということもないし。先代とは、不思議なくらい、好みが合ったんですねえ。」

―先代社長は、ご一緒に造ることが出来て、本当に幸せだったろうと思います。

（トモさん）「そうですねえ。『こうしたほう



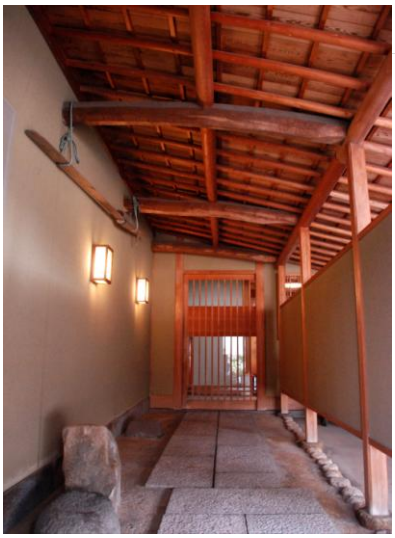
が綺麗なと思うけど、どうする？金はちょっとかかるなぁ…。』と言われたら、『そうやなあ、その方が綺麗やなぁ。ええよ、そういうふうにして。』ってお願いして。そうしたら、社長が『じゃあ、お金が出来たら集金に来るワ。』なんて言ってね。

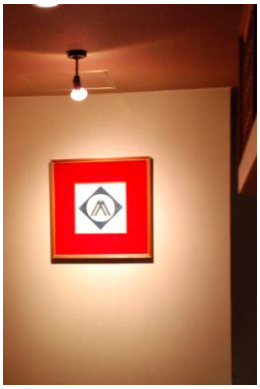
今の常務の一伸さんも、先代社長とは感覚がよく似ていると思いますよ。もちろん、時代が違うから、時代に合うように、また、うちのゆみちゃんのセンスと合うように変化はしていますけど。

そういえば、ゆみちゃんとかんちゃんの感覚は、よく合うみたいですねえ。だからどんな風に改造しても、ずうっとうちの好みには合ったまま。」

―魚定さんといえば、アプローチ、玄関がとっても綺麗ですが。

（トモさん）「そうでしょう！あそこを作っていた大工の田尾さんは、『もうこれがわしにとって最後の仕事やけん…』と、もう命





がけみたいにして作っていましたよ。アプローチの木材は栗の木ですが、栗って固いでしょう。手斧ではつる時も、他の大工さんは手がマメだらけになってはつれなくなって、田尾さんが黙々とはつって…。玄関ホールの、モロダ、見てくれました？あそこも、本当は桧の板を持ってくるつもりだったんです。ところが、田尾さんが、『最後の仕事やからこそ、満足のいく仕事がしたいんや。このモロダの材をここに釘一本使わず填め込むことは、わしにしか出来ん。どうしてもわしにさせてくれ。このモロダを使わせてくれ。』、と頼み込んだんです。結果、どこにもない玄関になりましたよね。」

―モロダって、すごく腐りにくい材ですから、なんだか縁起も良いですね。

（トモさん）「ある企業の方も、うちのアプローチ・玄関が大のお気に入りで、自分の家を造る時にも、『悔しいけどここの玄関ほど美しい玄関は見たことがない。しょうがない、富士建設にお願いするか。』って言っていたくらい。一歩このアプローチに踏み入れたとたん、『あら、素敵！』って思って貰えることはとっても嬉しいし、褒めてくれるとやっぱり鼻が高いですよ。」

―その玄関を造っていた頃が、いつですか？

（トモさん）「ああ、それが、このゆみちゃんがお嫁に来る頃。田尾さんがアプローチを造っている横を、『今から結納に行って来るワ。』『おう、がんばって！』なんて言って出かけたこともあります。」

―そのゆみさんですが、お嫁に来る前、こういうお仕事に縁があったんですか？

（ゆみさん）「いいえ、まったく！お嫁に来た時、初めてこの建物を見て、『わぁ！』とは思いましたけど、二十四歳でしたから、こういうところを手伝う、継ぐ、というのがどんなことなのか、実感もありませんし、想像もしていませんでした。あのね、魚定の父と母のそれぞれの兄弟が、併せて二十一人もいるんです。二十一人に、みんな配偶者がいて、四十二人でしょう。結婚式の時も、とにかくもう忙しくて、何が何だか分からないほどでした。第一、親族の集合写真も、普通のスペースじゃ入りきらなくて、魚定の宴会場で撮ったんですよ。（笑）」

―こんなことをうかがうのは失礼かもしれませんが、このお仕事って、本当に大変ですよねえ？

（トモさん）「大変ですよ！今は仕出しは止

めているのですが、昔は、旅館と仕出しと割烹と三本柱で、寝る暇もないくらい。毎日毎日その繰り返しでしょう。お得意さんが多いからこそ、お得意さんの好みも覚えなきゃいけないし。

冬の夜中、降り始めた雪を見ながら『なんでこんなに大変なんだろう』って涙が出たこともありますよ。」

(ゆみさん)「家族でやっているからこそできる、っていうのはあるかもしれませんねえ。お互いに融通を利かせ合って、休める時には休み、休めない時には協力し合って必死で頑張る。

あ、そういうときにも大家族が効果を発揮するんです。こんなに兄弟が多いのに、みーんな、呼べば届くような近所にばかり住んでいるんですから。すごいでしょ?(笑)」

(トモさん)「大変だったけど、でもおかげで、詫間で一番!っていう評価もいただけた。大事なお客さまもいっぱいできて。」

―うちの社員も、ずいぶんお世話になった(飲みに行っていた)と聞きました。

(トモさん)「そうそう。ツケで飲んで、給料日になると、お給料袋持ってそのまま魚定へやってくるんです。そうしたら、うちの娘が『はいはい、じゃあ、これだけがお支払い分ね』とそこから飲み代を貰う。(笑)まったく、そのくらい親しい付き合いだったんですよねえ。

面白いのは、そうやって日頃飲んだり、遅くまで宴会したりする社員の子は、お休みの日に家族を連れてやってくるんです。そうしたらご家族が恐縮して、『いつも遅くまでご迷惑をかけてすみません』って。

朝まで飲んで泊まった子には朝ご飯を作って食べさせていたんですけど、私はみそ汁を作るんです。そうしたら、『パンがエエなあ』なんて言う子がいて、『パンばっかり食べよるから、大きくならんのやで。』って叱ったり。その子、〈やせっぽ〉だったから。

今は、宴会の意味が変わりましたからねえ。上司と部下が飲むことも、もう少ないんでしょう?当時は、宴会が、本当に〈娯楽〉であり、交流の場でしたから。」

↑多くの苦労や喜び、幸せを共有してきたお二人。
こういった素敵な女性が代々魚定の歴史を守り続けている。

(ゆみさん)「でも、その宴会の意味が変わったからこそ、うちが今でも家族でやっていけるのかもしれませんよ。今も当時のままのものすごい忙しさが続いていたとしたら、家族のための時間なんて取れなかったかも…。」

―一〇〇年超の営業の中で、もう止めちゃおう!と思うことはなかったのですか?お話を聞いていると、日々の生活とこのお仕事とがぴったりと寄り添っていて、まさに『生業』という言葉を連想しますが。

(トモさん)「やっぱり、ずっと切れ目なしに良いお客さまが訪れ、利用してくださいましたからねえ。大変だったけど、楽しいこともいっぱいあったし。」

(ゆみさん)「なんといっても、家族で一緒にやっていること。家族ばかりだからこそ、気兼ねがないし、大好きな自分の場所だからこそ、掃除の仕方も、ものの扱い方も、自然と丁寧に、愛情を持ってするようになりますよね。

使っている材料も、たとえば肥松だったり桧だったり、こだわって選んでいるから、手入れを重ねればツヤが出てどんどん綺麗になるでしょう。訪れたお客さまから、『素敵ですね。他の部屋も見せてください。』なんて言われると、正直な気持ちとして、やっぱり嬉しいです。(笑)」

―ゆみさんは、お若いのに、こういう和の建物を愛おしんでくださるんですね。

(ゆみさん)「初めは、『あ、和風だな』くらいの感想でしたけど、長い間、常務さんと一緒に色々と改修を考えたりしたことで、今では眼が肥えちゃいました。(笑)あちこちの建物が気になって見に行ったりもするんですけど、『私ならこうするナ』なんて自分なりに考えちゃったりして。

今の家を建てる人たちは、若いひとが多いでしょう?その年齢のころは、まだ、こういう日本の美しい建物を意識して見たことがないし、眼も肥えていないと思うんです。家を建てる年齢層が低くなったことが、今の家づくりの流行りを変えたんでしょうけど、その人たちもきっと年を重ねれば、うちみたいな建物の美しさが伝わるようになると思うんですよね。

それに、たとえば襖紙、建具、照明にしても、ちょっと高かったり、手入れが大変だったりするけど、うちにしかない組み合わせ、オリジナルデザインのものがあることは、その大変さを十分にカバーしてくれるほど楽しいことですよね。手をかけて育てていくことの楽しさを味わえるのは、うちの建物が『本物』だからなんだ、と思っています。」

＊魚定旅館／三豊市詫間町詫間七二六の四

(聞き手・真鍋有紀子／写真・宮本英機)

「ハレとケ」のある　遊びかた・暮らしかた

この季節を暮らす。（4）

【一年の無事と新年への願いを込めて／酉の市】

まだまだ暑いと思っていたのに、急に肌寒くなってくるこの季節。　「お正月なんてまだまだ。」と考えているうちに、あっという間におおみそか…なんてこと、ありませんか？　私は毎年そのようになってしまいます。

さて、新年を迎える前に、その年一年の無事と、来たる年の福を願って行われる、『酉の市』をご存じですか？　関東を中心とした神社で、酉の刻（午後五～七時）ごろから開かれる露店市のことで、例年十一月の酉の日（十二支）に行われます。開運招福・商売繁盛を願うお祭りでもあり、江戸時代から続く代表的な年中行事です。

酉の日は、十二日おきに巡ってくるため、十一月に三回市が立つという年もあります。もともとは初酉（一の酉）が『酉の市』として定着していたと思われます

が、江戸中期より酉の市は賑わいを増し、次第に、二の酉、三の酉まで行われるようになったと伝えられています。しかし「三の酉」まである年というのは、火事が多いといわれています。その由縁はよく分かっていませんが、火事が大敵であった当時の江戸で、空気の乾燥する寒い三の酉の時期に、火への戒めを喚起したという説をはじめ、いくつかの説があるようです。今年の十一月、酉の日が何日あるか確かめてみて下さい。

【縁起熊手】

『酉の市』では多くの露店が並びますが、そこで目立つのが、おかめや招福の縁起物を飾った「縁起熊手」を売る露店です。

元々熊手は、穀物や落ち葉をかき集めるための道具として使われており、熊の手のように爪が広がっているため「熊手」といわれるようになりました。この熊手が昔、祭礼の日に神社の境内で売られることがあり、その熊手が、商売繁盛の神がまつられた神社でよく売れたことから「熊手で金儲けができる」といわれ始めたようです。

また、鷲が獲物をしっかりと捕らえることになぞらえて、その爪を模したともいわれ、福徳をかき集める、鷲づかむという意味が込められています。熊手は、翌年の更なる招福を願って、年々大きくしていくものとされ、大小様々なものが売られているようです。

さてこの「縁起熊手」、買い方に特徴があります。

熊手の取引では、値切れば値切るほど縁起が良いとされ、熊手屋さんとお客さんとの間に、駆け引きが行われます。値段を聞いて値切る、また値段を聞いて値切る。その繰り返しで、どこまでも値切ります。そして最後に商談が成立すると、値切った分だけを「ご祝儀」としてお店においてくるのです。

「さっきまでの値切りは何だったの？」と驚いてしまいますが、これが江戸っ子の粋な買い方だったのです。実質は熊手屋さんの言い値で買ったことになるのですが、買った方はご祝儀を出してちょっとした大名気分を味わい、売った方はご祝儀を頂いて、より儲かった気分を味わったそうです。

その後、商いの成立を意味する手締めを行い、家庭や会社の弥栄えをお祈りします。そして、家に持ち帰り、福を取り込みやすいように玄関などの入口に向けて少し高いところに飾るか、神棚にお供えしてお正月を迎えます。

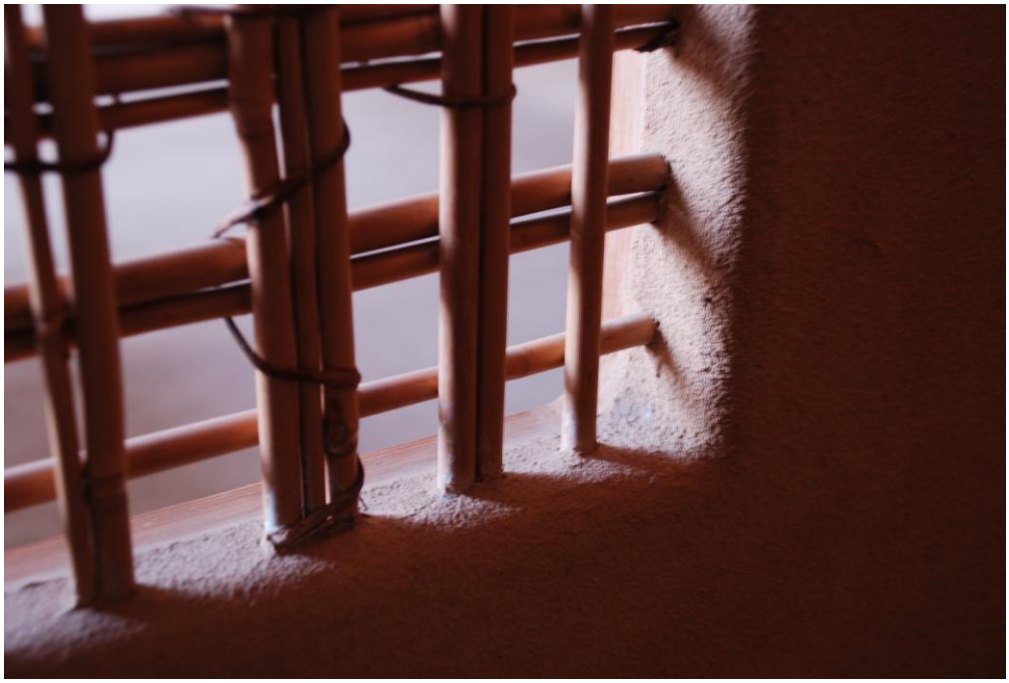
買い手、売り手、双方が気分よく新年を迎えられる。江戸っ子ならではの心意気が、爽快な印象を与えてくれますね。香川県では初詣の際に熊手を購入することが多いように思いますが、このようなお正月の迎え方も、是非挑戦してみて下さい。　（文・イラスト　／土岐倫子）

酉の市の様子

花ある数寄屋（4）

わたしたちが提案したいのは、依頼主の美学を反映した空間。
品格・調和・色気・遊び・技をキーワードに、
数寄屋の魅力をご紹介します。

「下地窓」



↑光の透けるさまがこころ休まる「下地窓」の景色。

掛け障子より光が差し込む。
ほんのりと花が浮かび上がるようで美しい。→

下地窓とは、本来、壁を塗り残し、下地の見えている窓のこと。

古くより茶室で多く用いられた窓で、「助枝窓」とも書き、「塗り残し窓」「掻きさし窓」などとも呼ばれます。

また、その誕生には、『千利休が荒れ果てた茅屋の壁を見て使用を思いついた』、という逸話もあり、風雅を表現する手法として、現代まで様々な建築家による多くの例が残されています。

皮付き葭や竹を格子状に編み、藤蔓を絡ませて意匠的に仕上げた窓から差し込む光は、端正で美しい影を落とし、特に薄暗い茶室の壁に趣向を凝らして位置を決め、開けられた下地窓は、あかたもスポットライトで照らしたような鋭い効果を生み出します。窓の形も新月窓、丸窓、平隅切り窓、櫛形窓、火燈窓、欠円窓などさまざまあり、光の分量、影の様子をイメージしつつ、デザインや位置を決定していきます。

そして、内側には「掛け障子」を。下地窓以外にも、視線を遮ったり、独立した空間として強調するためにも、「掛け障子」は活躍します。

今はなかなか小舞を組んで壁を塗る、ということが少ないですから、本来の「下地を塗り残した窓」とは言い難いかもしれませんが、現代的な技術によって施工された建物でも、同じような意匠の窓をつくることは可能です。従来通りの使い方はもちろん、たとえば、間接照明として、下地窓越しに光が差し込む、というデザインを考えても素敵なのではないでしょうか？

自分なりの個性を反映させ、こころ休まる「明かり」とりとして、和室、玄関などに、下地窓の意匠を取り入れてみませんか？

中津万象園

「花の歳時記（4）紅葉」

江戸時代に皇族や諸大名が競って造営した池泉回遊式庭園には、茶室・茶庭が不可欠の要素でありました。この中津万象園も築庭当初は「中津の御茶屋」と呼ばれていたように多くの茶室が林泉の要所に配置されていましたが、現存している茶室は池泉の北西部に位置している「母屋」と茶室「観潮楼」の二棟のみとなりました。

この茶室は園の景観の要として重要な役割を果たしていますが、池泉の西側から「観潮楼」の横顔を望む景も捨てがたいものがあります。特に晩秋ともなれば茶室周辺のモミジやハゼノキが一斉に紅葉して、一年で最も華やかに彩られます。

＜中津万象園・丸亀美術館へのアクセス＞
瀬戸中央道路　坂出北ICより約 8.5km／約 15 分
坂出ICより約 14km／約 20 分
高速道路善通寺ICより約 5km 約 10 分

この景を見るにつけ、約二百年前丸亀京極藩中興の藩主として名を馳せた六代目藩主高朗候が、しばしば中津別館を訪れ、琴峰詩鈔に多くの漢詩を残したことを思い出します。それらの中で、晩秋この茶室「観潮楼」で詠んだと思われる「中津即興」と題した漢詩七言絶句の一部をご紹介させていただきます。

水涵岸竹枝々翠　霜染庭楓葉々紅
捲箔日光来席上　凭欄雲影落杯中

（長岡　公）

（七言絶句　訳）
池の水は岸辺の竹を潤して枝は翠に映え、庭の楓は霜を受けその葉は真紅に燃えている。簾を巻き上げると茶室には秋の光が射し込み、欄干に寄りかかると雲影が盃の中に浮んでいる。

【長岡　公　氏】
昭和 2 年 10 月　香川県丸亀市津森町に生まれる。
昭和 26 年 3 月　鹿児島大学鹿児島農林専門学校農学科卒業
昭和 26 年 4 月以降　香川県公立高等学校教員として主基高等学校・飯山高等学校・笠田高等学校・農業経営高等学校教諭、高松南高等学校・飯山高等学校教頭
昭和 63 年 3 月　定年退職　香川西高等学校教頭
現　在　（財）中津万象園保勝会　理事
※主な著書に「讃岐の名園紀行」（栗林・玉藻編／中・西讃編）がある。

古来より季節を感じさせた「色」を知る。

かさねの色（4）「朽葉」

日本人の季節を感じる心、美しいと感じる色彩感覚。そういったものの結晶とも言える「重色目（かさねいろめ）」は、平安時代に生まれ、季節の移り変わりを表現する配色として併せ仕立ての着物などに用いられました。現代でもしつらえなどにいかして、平安の風雅を味わってみては…。

表：濃紅／裏：濃黄
着用時期は秋。
朽葉とは、落ち葉のこと。
実際の落葉の色と同様、この色目にも赤・黄・青の三種があります。

【編集後記】　今回の物語のある建築は、詫間町の老舗割烹旅館、魚定さん。ここを守る女性たちの生き生きとした表情、笑顔がとても印象的な、素敵なインタビューでした。

大好きな詩に、「子どものきらきらと輝く好奇のまなざしで／世の中のすべてを見るように／人生をかみしめるように」という一節があります。

日々起こる様々な出来事を、「世の中ってそんなものでしょ。」とあきらめない。新鮮な心持ちで物事に接し、子どものような好奇心をもって世の中を眺め、広く心を開いて人生の一刻一刻をかみしめるように丁寧に味わう。

『人生を楽しむこと・喜ぶことに上手になる』、その延長線上に、仕事のヒントも、人との信頼関係も、実は存在しているのかもしれないナ、と思いました。

**********御意見、御感想をお聞かせ下さい**********

建設業許可：香川県知事許可（特 18）第 189 号／一級建築士事務所：香川県知事登録 第416号／宅地建物取引業免許：香川県知事登録（10）第 1997 号

FUJI
富士建設株式会社
本社：〒769-1101
三豊市詫間町詫間 300 番地 1
TEL0875-83-2588（0120-832589）
FAX0875-83-5864
http://www.fujikensetsu.jp
mail　y-manabe@fujikensetsu.jp　（真鍋有紀子）

【発行者紹介】富士建設株式会社は、現存する五重塔55基のうち2基を建立し、「建築は文化なり」を理念に掲げて、官公庁建物・各種施設等大型建築物をはじめ、数寄屋風住宅、デザイン住宅、リフォームまで幅広く施工している。また、県下において 1300 区画超の宅地開発・分譲の実績を持ち、「街づくり」に対する貢献には定評がある。なお、丸亀市指定名勝である「中津万象園」の修復維持保全活動も行っている。

■営業所：高松営業所・丸亀本店・観音寺営業所
■中津万象園・丸亀美術館／丸亀プラザホテル／味処　懐風亭